

東日本大震災被災地被災教会で祈りを合わせる旅（教区版）

東日本大震災発生から1年半が経過しました。まだ1年半なのか、もう1年半なのか、立場や見方を変えると、時の経過に対する感じ方も変わることでしょう。被災教区でもある関東教区は、教区内外での様々な支援活動に携わってきました。献金やお祈りなどのお支えは、教区内全ての皆さんが参加して行われているところです。

一方で、世の中の被災地への思いは、時の経過と共に薄れていくのも事実です。マスコミは福島第一原子力発電所の事故をきっかけにした反原発やエネルギー政策への関心事を取り上げ、あるいは復興の第一ステップとしての震災瓦礫受け入れ問題に注目していますが、被災地の人々の生活や、今抱えている苦悩を取り上げることは少なくなっています。それもこれも、私たちの関心が自分の生活を脅かす事柄に向けられていき、被災地で生きる人々への関心が低くなりつつあるからに他なりません。致し方ないこととは言え、今も被災地では数十万の方々が、震災を原因とする様々な重荷を負って生きているということを忘れることはできません。

日本キリスト教団は、奥羽、東北、関東の被災三教区内の被災教会や関係施設、学校の再建並びに補修を含めた支援活動全般のために、10億円募金を募っています。関東教区内だけでも2億5千万円を必要とする試算も出ています。私たちは祈りを合わせながらこれに取り組んでいかなければなりません。そのためには、被災地への関心を持ち続けることが必要です。

そこで、被災地被災教会（奥羽・東北）を訪ねる旅を企画いたしました。ボランティアとしては行く自信がないとか、不安があるという方でも、実際にかの地を訪れ、空気を吸い、匂いをかぎ、被災者の方々に会い、祈りを合わせることで、これからの継続的な支援への関心を高めていただける機会になればと思います。もちろん、関東教区が被災教区であり、再建や補修のために助力を必要としている教会や学校があり、また東北と同じように苦しみの中におかれている被災者の方々がおられることは承知しています。そのことを覚えつつ、今回は奥羽・東北での祈りの旅へお誘いいたします。被災された方々を覚え、共に祈りましょう。

日 程：11月20日（火）～22日（木）

訪問先：会津放射能情報センター、新生釜石教会、大船渡教会、陸前高田市、
気仙沼市、石巻市、石巻YMCA支援センター、仙台エマオ

参加費：29,800円（バス乗車までの交通費別）

募集人数：24名（最少催行人数15名）※残席わずか。お早めに！

団 長：秋山徹関東教区総会議長（上尾合同）

ガイド：新井純（十日町教会）、長倉望（新潟教会）

申込締切：10月22日（月） 但し定員になりしだい締め切り

旅 程：別紙を参照ください

申し込み&問い合わせ先：新井純 025-752-2068

FAX 025-752-2189

「にいがたはうす」

長倉 望(新潟教会・新潟地区被災支援委員)

新潟教会は、今年の G.W.から、会津放射能情報センターと協働で、小さな被災支援を始めました。その名も「にいがたはうす」。福島に暮らす子どもたちとご家族が短期滞在し、のびのびと過ごしてもらおうための1軒の家です。

ことの起こりは会津での出会いでした。今年の1月下旬、新潟地区被災支援担当として、新井純牧師と共に3度目の被災地を巡回訪問したのですが、私たちが「会津放射能情報センター／放射能から子どものいのちを守る会・会津」をお訪ねした時、たまたま5才と3才のお子さんの短期保養の相談にいらしたご夫妻のお話を伺うことができたのです。短い時間でしたが、福島で子育てをすることの不安と閉塞感がひしひしと伝わってきました。

新潟は福島に隣接していながらも、地形や風向きにより放射能の影響が比較的少ない地域です。少しの時間でも新潟で過ごすことによって、子どもたちにも、お父さんお母さんたちにも、元気と笑顔を取り戻して欲しい。そのために何か出来ることがないだろうか・・・そのご夫妻との会話の中で思いめぐらしていた事が、不思議な導きと多くの祈りと支えの中で実現したのが「にいがたはうす」です。教会員が所有する空家を提供してくれました。会津放射能情報センター役員の方々も話し合いのため新潟に出向いてくださり、協働プロジェクトとなりました。新潟地区からも支援を頂いています。



これまで(9月17日現在)、延べ15組(大人31名、子ども21名)のご家族が、1泊2日から3泊4日という形で利用していただいています。「にいがたはうす」に備え付けられているゲストブックには、たくさんのお大切な言葉が書き綴られています。「夕日を見ながら海を子どもとお散歩できて嬉しかった」「子どもが石や砂を、『これ放射能ない?』と聞きながら、嬉しそうに遊んでいました」「あたりまえのことが有り難かったです」「妻が本当にのんびりしている姿をみて、来てよかったと思いました」。そんな一つ一つの言葉に共感し、ご家族の姿に思いを馳せ、「にいがたはうす」を喜んでもらってよかったと思います。

確かに、それら一つ一つの言葉は、悲しみや痛み縁に縁られた言葉です。大変な苦勞が一つ一つの言葉の背後にあることを知らされます。けれども、それと同時に、そこには困難な中を、生き抜いていこうとする“いのち”があります。そんないのちの営みを共にすることができること、こんなに大きな喜びはありません。いのちの声に励まされ、教えられ、指し示されて、新潟での自分たちの歩みを重ねていくことができるのは、本当に大きな恵みです。

たった1軒の家です。福島で暮らす子どもたちの数を考えれば、焼け石に水とはこのことかもしれません。でも、大きなことはできなくとも、たったひとつの命のために働き、どんなに自分たちの小ささ無力さを思い知らされてもなお、その小ささに神の業があらわれると信じるのが、わたしたちの信仰です。どうか小さな働きのためにお祈りください。